



札幌市博物館活動センター 情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

No.77
July 2022

ドクゼリ

その名のとおり、毒のあるセリ科の植物で、水辺に生えます。山菜のセリは最大でも高さ60cm程度ですが、ドクゼリは1~1.5mにもなる植物です。北海道では泥が厚くたまった沼や水路で見ることができます。写真は、調査中にひざ下まで泥に沈みながら撮影しました。



札幌市の花スズランは、かつては花束にして売られていたほど市内に群生地がありました。今、生育地は市内に数カ所しか確認できていません。このように今後の生育状況に注意できないと市内で絶滅の恐れのある動植物をまとめたリストが「札幌市版レッドリスト2016」(札幌市環境局)です。このリストには動植物297種、そのうち植物は123種が選定され、スズランは「留意」というカテゴリに入っています。

レッドリスト(またはレッドデータブック)と呼ばれるものは、絶滅危惧種の一覧です。絶滅の危険性の区分であるカテゴリは、その生き物が「なぜリストに入っているのか、どのような状況にあると考えられているのか」を知る目安となります。こうしたリストは全国をはじめ各都道府県や市町村それぞれのエリアを対象に、専門家が検討してまとめられ公開されています。対象とする地域が異なれば地形や環境も地域独自の特

徴があるため、カテゴリの基準も少しずつ異なります。その結果、例え同じ生物であっても全国、北海道、札幌市ではそれぞれ違うカテゴリに入っている、またはリストにすら載らないこともあります。スズランもその1つで、全国(環境省2020)、北海道(2001)のリストには掲載されていません。

「札幌市版レッドリスト2016」のカテゴリ区分は地域の実情に合うように設定されています(表)。リストに掲載された種をどのカテゴリに入れるのが適切なのかは、これまでの文献や標本など蓄積されている資料や、地域の植物研究家が把握している“現場の情報”の聞き取りに頼る部分が大きくなります。中には最新の情報が無かったり、過去の情報がはっきりしなかったりするものもあります。そのため、リストは更新されることを前提に作られています。

博物館活動センターでは「札幌市版レッドリス

表:「札幌市版レッドリスト 2016」のカテゴリと概要

カテゴリ		概要
今は見られない		かつては生息・生育していたが、札幌市では現在は見られなくなり、野生での生息・生育の可能性がないと考えられる種
絶滅危惧	絶滅危惧IA(いちえー)類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種
	絶滅危惧IB(いちびー)類	IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種
	絶滅危惧II(に)類	絶滅の危険が増大している種
準絶滅危惧 ※次ページでは「準絶」と略した。		現時点での絶滅危険度は小さいが、生息・生育条件の変化によっては絶滅危惧に移行する可能性のある種
情報不足		評価するだけの情報が不足している種
留意		保護に留意すべき種

「札幌市版レッドリスト2016」(札幌市環境局)より作成。表の上から順に、絶滅または絶滅の危険性が高い順になっています。「絶滅危惧種」と言うとき、厳密には表で色をつけたカテゴリを指します。

【引用文献】 札幌市版レッドリスト2016 <https://www.city.sapporo.jp/kankyo/biodiversity/redlist.html#redlist>
 北海道の稀少野生生物北海道レッドデータブック <http://rdb.pref.hokkaido.lg.jp/index.html>
 環境省生物情報収集・提供システム「いきものログ」 <https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/>

ト2016」の公表を機に、2016年から独自に札幌の希少植物の現状調査を行い、2021年までの6年間で合計47種を現地で確認しています。中には展示を見た市民から情報をいただいたものもあります。当センターの調査結果が次のレッドリストの更新に活用できるよう、札幌市環境局とも連

携を進めています。

「札幌市版レッドリスト2016」のガイドブックは全23ページですが、レッドリストの地域性やカテゴリーの意味を知っていると、その中身は23ページ以上の厚みがあることが分かってくるのではないかと思います。



IA類 ジンヨウキスミレ



IA類 ホテиаツモリソウ



IB類 エゾサンザシ



IB類 ヒロハガマズミ



II類 サルメンエビネ



準絶 エゾノハナシブ



準絶 イトキンポウゲ



情報不足 ハイハマボス



留意 スズラン



留意 ノハナショウブ

「恐竜が好きなので来ました」
が一番多い札幌市博物館活動センターへの来館理由。
当センターのメイン展示はサツポロカイギュウという海生哺乳類の骨格標本であり、残念ながら恐竜ではありません。
来館のきっかけは「恐竜」でも、そこから知識が広がり、古生物なら発掘だけでなく地質や年代測定、化石のクリーニングなど、研究し深められるものは多様にあります。そして現生の動植物、はたまた博物館の活動自体に興味を持つことで学びの可能性は無限大に広がります。
実際に子どもの頃に当センターに来館したことをきっかけに、より専門的な分野の道に進んだ常連の方もいます。

ホット
コラム

展示室につき
きっかけは○○○?

○月×日 展示解説員 前田 亜沙美



コレクション クエスト

ふだん公開していない
収蔵物を紹介します。
さあ、標本の世界を冒険だ!

2021年8月、東京都心の南およそ1300kmの洋上、小笠原諸島の南にある福徳岡ノ場と呼ばれる海域で海底火山が噴火し、大量の軽石を放出



標本番号SMAC4318

採集日: 2021年11月12日、15日、産出地: 東京都小笠原諸島福徳岡ノ場、採集地: 沖縄県北谷町砂辺海岸(漂着)、採集者: 藤彰矩

しました。その一部が数カ月後に沖縄本島に流れ着き、北谷町文化財資料室の藤彰矩氏が採集し、いしかり砂丘の風資料館の志賀健司氏に届けられ、当センターがその一部を譲り受けました。

太平洋プレートがフィリピン海プレートの下に沈み込み、その一部が解けて噴出した福徳岡ノ場のマグマは、やや粘性のある安山岩質のマグマであったことから、溶岩ではなく軽石となって浮遊し、長旅の末におよそ1500km離れた沖縄に、そして札幌まで運ばれました。

文/学芸員 古沢 仁

File No.13 文化をつなぐミュージアム

SMAC活動レポート

当センターで行われる、市民の自主的活動や、学校との連携など、さまざまな活動を紹介しします。

文化をつなぐミュージアム。これは、2019年に京都で開催された国際博物館会議で提唱された博物館の役割の一つです。社会や地域と連携して、課題と向き合うための一助になることは、博物館の大切な役割です。

博物館活動センターでも、地域や学校と連携した事業を行っています。2016年度から実施しているデリバリーミュージアムでは、学芸員が小学校に出向き、札幌や学校周辺の地形の成り立ちを解説し、子どもたちにも好評です。

また、山鼻未来・ネットワーク協議会主催の「山鼻未来講座」に学芸員が講師として出向き、自分たちが住んでいる地域の地形とその成り立ちを解説しました。

これからも、文化をつなぐミュージアムとして、さまざまな連携事業を行っていきます。



写真: 2022年3月26日に行われた山鼻未来講座の様子



交通アクセス

- 地下鉄南北線「澄川駅」北出口から徒歩約10分
- 地下鉄南北線「南平岸駅」東出口から徒歩約14分

札幌市博物館活動センター information

入館料: 無料
開館日: 火曜～土曜 開館時間: 10時～17時
休館日: 日曜・月曜、祝日、年末年始(12月29日～1月3日)



ホームページアクセス
二次元コード



札幌が、もっとはじまる。



発行 札幌市博物館活動センター

〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条15丁目1-6 Tel: 011-374-5002 Fax: 011-374-5014
Email: museum@city.sapporo.jp ホームページ: <https://www.city.sapporo.jp/museum/>



ミュース・レターは、植物油インキおよび、環境省が定める「グリーン購入法」の適合紙を使用しています。